



## ヴェルダン戦

敵がドイツ軍を決定的にフランスとベルギーから追い払うべく、大攻勢が近づいていることを至るところで華々しく予告していたと思ったら、2月末、突然電文がドイツ軍のヴェルダンに向かって進出しているというニュースを伝えてきた。悪いドイツ人はまたしても行動の自由を失わないようにして、敵に先んじて決戦をどこで行うかを決めたのだ。フランス軍は予備役をすべてここに投入し、弾薬の備蓄を解除したために予告していた大攻勢は早くも立ち消えになってしまった。

フランス軍の優秀な中核部隊が投入され、見事な勇敢さでそれぞれの地歩を防衛しているが、われわれはヴェルダンの防御施設がひとつずつ陥落しているのを見、ドイツ軍の鉄の壘壁が容赦なく近づいていくのを目にしている。終結はもはや疑いを容れない。

このヴェルダン戦をこの戦争の最大規模の企画、ドイツ参謀本部の最大の

業績と呼んで良いだろう。たとえばフランス軍が10月攻撃で試みたような、奇襲による突破とそれによって塹壕戦を急速に移動戦に変化させることは不可能であることを明確に認識して、ドイツ参謀本部は正面からこの難事に取り組んだのである。フランス軍の配置全体を防御のために突きだした腕と考えると、ヴェルダンが肘に当たる。この肘を勢いよく叩いて破壊することを参謀本部は課題としたのである。敵に策略を仕掛ける試みはなされていない。胸と胸を突き合わせた格闘が情け容赦なく行われている。要するに、俺の方が強いのだ、お前が分かるまで殴りつけてやる、ということだ。そしてこの作業は完全に計画どおり遂行されている。敵を特別な策略でだますような試みは見られない。よく練られた計画がゆっくりと、一個一個実行され、最終目標に向かって進められている。

ベルギーと北フランスの要塞の陥落が早かったことに驚かされたことに比べて、ヴェルダンではなかなか先へ進まないことを不思議がる人がいる。ドイツの攻撃はこれをもって完全に終結したとフランス人は幾度も歓喜の声を上げ、その都度あとから思い知らされるのだった。しかしよく考えて欲しい。ヴェルダンは、その地方の丘と森に囲まれていることだけでも立派な防御力を持っている。そして戦争の当初に経験した奇襲を考慮しても1年半で拡充を完成することができたのである。わが軍も前面にある地帯を越えて、やっとヴェルダンに接近する有様なのだ。しかし最終的にはドイツ参謀本部にとり、ヴェルダンの陥落が少し早いか遅いかは全くどうでも良いことである。わが最良の敵、フランス軍部隊がヴェルダンの防御だけですり減るか、それともその後の移動戦で問題にならなくなるほど弱体化するかは同じことだ。それよりも、ずっとその前に片付いた方がもっと良いわけだ。いずれにしる、敵軍をすべて交戦の場に來させることは達成できた。5月初頭の段階のドイツ参謀本部の報告によると、フランス側51師団、つまり80万の兵士で、動員可能なフランス軍の半数がヴェルダン付近の会戦に派遣されたが、その後おそらくもっと増えただろう。イギリス軍はその他の前線をもっと引き受けざるをえなくなったので、すでにフ

ランス軍の予備軍すべてがヴェルダンに集結したと言って差し支えない。ドイツ参謀本部の計画がすぐれていることを見事に証明するのは、フランス軍は圧倒的な軍勢を擁しているにもかかわらず（ドイツ軍の投入した人数の2倍だという）、いつも事前の準備もしないままにわが軍の進撃を受けていることである。どうやらドイツ軍の進撃の中心がどちらに向かっているのか、明確に把握したことが一度もないようである。そして反攻のために多数の部隊をたとえばドウオーモンに集結すると、ドイツ軍はその地の激しい攻撃など知らぬ顔で、ふたたびマース川の西岸に進軍し、新しく地歩を獲得するのである。

これまでの戦闘の経過は次のとおりである。2月21日、皇太子軍がヴェルダン北方および東北の攻撃目標となる要塞に一番近い場所で攻撃を始めた。従来までそこにいた部隊に、増強のため7師団、約28万人の兵が合流したと称されている。

朝、砲兵隊の激しい砲撃が開始された。それは11月攻勢でのフランス軍による集中砲火さえかすむほどのものであったという。その時フランス軍は数日にわたって集中砲火を浴びせたのに対し、ドイツ軍の場合、午後5時には歩兵隊は突撃を始めている。そして、あらかじめ決めておいた地帯を奪取した。われわれはくりかえし何度もこの分担作業を目にし、損失を最小限に抑え、見事な収穫をもたらす全ての武器のすばらしい共同作業を耳にしている。ここで、わが軍のいつ見てもすばらしい砲撃の準備作業も言及せねばならない。その戦術は、主たる突破地点への砲撃で特に他の地点への砲撃も行い、その結果その地点も目標になっていると思わせることによって、現在ほんとうに突破目標となっている地点への増強が行われなようにする作戦なのである。こうして最初の10日間の成果は、

- 1) 北部方面:オーモン、サモニュー、ブラバン、ポーモン、オルヌ、シャンプレット、モクール、コトレット、シャンヌヴィル、その外側にある村、森、高地、バリケードを築いた農地といった防衛線上の多くの堡塁。

## 2) 北東方面：アルドーモン、ディエップ、フロムゼー、アボクールの 堡塁施設とドウオーモン要塞。

この要塞の意味を理解するには地図を一瞥するだけで足りよう。これは、堡塁地帯の北の守りとして肩にあたり、これを失うことは防御側にとって由々しいものにちがいない。このようなことはアントワープでの戦闘で目にしたものであり、攻撃地点の選択の際このことへの考慮もきっと入っていたことだろう。ブランデンブルク部隊によるドウオーモン奪取が第一級の戦功であることは、そのような諸要塞がどんなものなのかを描写することで、おのずと明らかになるだろう。諸要塞の周囲とそれらのあいだの地帯にはもちろん火線が引かれ、火器は歩兵および砲兵を守るために1つの塁壁上か2つの塁壁に重なり合うように置かれている。個々の要塞を攻撃するには、まず機関銃で脇を固めた有刺鉄線の幅広い障害を越えていかなければならない。その後ろには深さ約8mの壕が控えている。ヴェルダンでは、この壕の壁は双方ともコンクリートか岩でできているそうである。胸壁はコンクリートで固められている。その中には装甲哨戒塔がある。もっとも重要な個所には、沈降可能な装甲ドームの中に攻撃されたときに使われる機関銃が置かれている。胸壁の間にある要塞の覆いは鉄筋コンクリートでできている。これに対し天井下の要塞の構内には巨大なコンクリート塊があり、その上には重火器のための装甲塔が立ち、下の深い場所には弾薬庫がある。このような装甲した砦を奪取することは戦争勃発時には不可能とされていた。

タイムズ紙はヴェルダンへのドイツ軍の攻撃を、この要塞がまさに要塞構築技術の教科書だから見込みのないものと見ている。しかしこのイギリス紙はエメリヒとベスラーのような男が、そのような「要塞構築技術教本」に対する攻撃のための教科書をみずからの行動を通して書いたことを忘れて

戦いはさしあたり北東方面で続いた。主としてヴォー要塞の支配を巡るものである。一度は獲得したが、後には失っている。

同時にヴェルダンの南東方面への攻撃が始まった。3週目にはフレーヌがわが手に落ち、この区間で3マイルの前進を見た。

一方この間に、マース東岸でも戦いの準備が進められていた。ベルリン通信員の報道によると、ドイツ軍はここで砲兵隊を100mの間隔で並べていたそうである。まず「死人」陣地が手に入り、それによって北西からの攻撃が開始された。ここでも歩兵隊は第三週の初めには3マイルの幅の前線を進軍、「死人」の近くのフォルジュを取った。この後何日かはフォルジュ南方のフランス陣地を幾度も征服したり、失ったりした。戦いは一進一退を続け、3月31日になってようやく激しい夜襲の後にマランクールを奪取に成功した。これによってフォルジュ川の北方のフランス軍陣地がすべてドイツ軍の手に落ちた。わが軍の戦線はこの小川にまで進んだので、かなりの区画を得た。歩兵はさしあたりの休息を取ったのである。

その後、戦闘から46日目にあたる4月6日、フランス軍左翼の拠点にあたるオークールを取った。ここからはフランス軍の戦線と要塞に側面から砲火を浴びせることができ、2日後（4月8日）にはもうベタンクールとこのフランス戦線の突出部をわが手に収めることができた。翌4月9日にはオークール、ベタンクールからドウオーモンにいたる13マイルの長さの前線全体にわたる総攻撃が始まった。数時間後にはベタンクール南西の堡壘陣地、「アルザス」と「ロレーヌ」がわが手に落ちた。この攻撃は1週間に及んだ。いろいろな塹壕陣地が、その最重要なものとして「死人」が挙げられるが、奪取されたが、フランス軍戦線はどの個所でも突破できなかった。

フランス軍は、ドイツ軍の攻勢が崩壊したものと考え、あちこちの小さな区画で反攻に出たが、至る所で反撃に遭って押し返され、特別に取り上げるような大きな損失を出した。

ドイツ軍が攻撃をあきらめることを全く考えていなかったことは、ザクセン軍が4月18日のマース川東岸、オールドルモンの南、ティオーモンの北西にある700m陣地を奪取したことでわかる。またしても敵軍の将校

42名と1646名の兵士が負傷者なしで捕虜となり、戦闘の開始以来の捕虜数が将校710名、兵卒38155名となった。ところがこの際にくり返し言い訳のように報告されるのは、もはや負傷していない捕虜はいない。というのもフランス兵は実に勇敢に防戦したので、戦闘で命を落とさざるをえなかったからだというのである。それから何週間か、主にマース川西岸で「死人」方向とティオーモン東部でどんどんきつくなっていく鉄の帯を破ろうとするフランス軍の試みが見られた。その成果は微々たるもので、大きな損失を出しながら幾度も退却に追い込まれた。5月8日にドイツ包囲軍はオークール南東の304高地の征服によって再びかなりの前進を果たした。フランス軍は必死になって抵抗している。幾度となくこの高地を取り返そうと試み、その都度特に言及されたような死傷者を出し、捕虜、大砲、機関銃を失っている。5月22日ドイツ軍は今や確保した高地に大砲を設置することができた。すなわち、これによってエーヌ高原に砲火を浴びせることができるようになったということで、アヴクール・エーヌ・シャタンクール線の陥落がそれに続くことになり、この時期引き続いているキュミエールとコレット森を巡る戦いがわが軍有利のうちに決着を見ることになる。これはパリ・ヴェルダン間の鉄道を制したことを意味する。事実、キュミエールとコレット森はヴェルテンベルク軍の突撃で既に手にしている。しかしこれはまた「死人」にあって、これまでに完全な姿にまでなっていないドイツ砲兵陣地の負担を軽減するものとなった。

同じ日、マース川の右岸でもドウオーモン付近で失っていた地帯がふたたび完全にドイツ軍の手に落ちた。

その後、くり返しフランス軍がマース川の両岸で攻撃をしかけるが、捕虜が増えるばかりで、その数は徐々に5万を超えるようになった。ドイツ軍は常にその足場を確保し、前線への攻撃で圧力をかけ続けている。6月2日には、苦勞してフランスにまで派遣してきたロシア軍の2千人をはじめ捕虜とした。

それから代わって、マース川東岸へのドイツ軍の攻撃が強まり、6月5

日にはヴォー要塞がわが手に落ちた。その数日後には、早くもそこからドイツ軍の大砲がタヴァンヌとスヴィルの要塞めがけて砲撃を行っている。まとめて大まかに見ると、敵の最強の個所に堂々と、はっきり攻撃をかけていることが見て取れる。必要と思える場合には側面からの動きを加えるが、ふつうは単純に強力な正面攻撃をしかけている。個々の行動はすばらしく正確に行われ、それらが全体として統合されて、司令部と灰緑色の実戦部隊兵士たちによるひとつの輝かしい戦績となっている。攻撃が始まったとき、フランス軍司令部はそれが別の場所への攻撃を隠蔽するための単なる陽動作戦だと思っていた。ヴェルダンが実際に攻撃されるとは思わず、またヴェルダンにいる予備軍で撃退することができると思っていたのである。

この過ちの穴埋めができないうちに、ドウオーモンを失ってしまったのである。実際のところ、ドイツ参謀本部も、開戦時のベルギーの要塞のように、ヴェルダン要塞そのものを獲得しようというつもりは全然なかった。むしろヴェルダン作戦（今回の軍事行動はそういう性質のものだ）に、2つの目的が隠された新しい戦術を見なければならない。

- 1) 軍事力行使の手段としての、また攻勢をかけるための拠点、出撃門としての要塞を無用にすること。
- 2) 敵軍全体を敗退させること。

最初の目的はすでに達成されている。砲撃で破壊されたヴェルダンは拠点、出撃門としても、攻勢失敗後の待避場所としてすらも無用となった。ここからの攻勢が計画されていたことは、1月の段階でフランス軍の飛行機がロレーヌとメッツでビラをまき、まもなくその地で戦いが繰り広げられ、すべてが破壊されることになるので、住民に自分の身と所持品を安全な場所に移すよう求めたことから推察していいであろう。実際、メッツの前衛は大口径弾による砲撃を受けている。またフランス軍はコンブル高原からドイツ軍を追いつ追出そうとした。大攻勢の4月15日という正確な日付さえ出していた。実際、この時期にフランス軍はマース川の東岸と西岸で攻

勢に出たことは注目すべきことである。この攻勢は、ドイツ軍がその前にそこに着いていて、出撃門をみずから作り出していたことから、息の根を止められてしまったのである。ヴェルダンもはや軍の待避場所ではなくなり、戦術上の意味が逆のものになってしまったからだが、軍が野戦で守らなければならないものとなった。

ヴェルダン作戦の主な目的、すなわち敵軍の敗北をめざして今なお戦いが行われている。巨大な損失をこうむったために、フランス軍の戦闘能力はすでにかなり落ちている。これから先も、この調子で行くべきである。この戦いで重要なのは要塞の運命ではなく、軍隊の運命である。核となる要塞を攻撃できるために前衛の防御施設を打ち砕くのではなく、この前衛で雌雄を決し、フランス軍を戦場から駆逐すべきなのである。行軍にはいつでも時間が必要である。しかしその結末には当然ながら何の疑問もわき上がることはない。時計の正確さと打ち付けるハンマーの勢いをもってヴェルダン郊外のドイツ軍作戦は遂行されるのだ。

## 北海の海戦

北海海戦についてイギリスから来た最初の頃の電文報道は、前号の編集終了直後ゆえ掲示板で知らせておいたが、ドイツの海戦勝利がイギリスで巻き起こした際限ない混乱と狼狽を表している。この驚くべき打撃を目の当たりにして、イギリスの新聞は戦争が進む中で何度も見せた巧みな嘘と歪曲さえも言えず、しばらく経ってようやく自分の任務を思い出し、この重大な敗北をもイギリス海軍の勝利に仕立て上げたのであった。

最初啞然としたことが十分にイギリスらしかったとすれば、今やイギリスのどの新聞でもわき起こっている実にヒステリックな叫びはさらにイギリスらしいものである。われわれはイギリスからの報道では行間を読むことをこれまでに学んできたので、勝利の喜びを強くするばかりである。以前

からおなじみの面々、たまたま船が戦場に居合わせた中立国の船長、名前を出されることのない高級将校、ドイツ人捕虜、「ひげ面のイギリス水兵」さえ登場する。彼らはみんな、海戦がイギリスの大勝利に終わったことを伝える。

イギリス側の立場から見ると、世界に目くらしをかけようとする大いなるこの努力はよく理解できる。イギリス政府は、陸上で同じぐらいに大敗北を喫したなら、海上での失敗よりむしろ進んで認める決断をしたことだろう。イギリスは、ただひとえに無敵艦隊という名声に基づいてその巨大な植民地帝国を築き上げたのであり、同盟国が強力な支援を要請するときには常にさし示すことができるものは、唯一その艦隊とその「海上支配権」を指差すことだけなのである。もしこの名声が揺らげば、イギリス世界帝国の実際の基礎に危険な打撃を与えることになる。それ故にイギリスの新聞は荒れ狂ったように敗北の印象を塗布しようと努力するのである。

もちろんわれわれにとっては、実際の経過と損害についてのイメージをつかもうとする場合、ドイツ海軍本部の報告のみが頼りとなる。「ドイツ海外通信」は、6月6日分として以下のようなベルリンからの詳報を伝えている。

ドイツ大洋艦隊は、最近もたらされた報告によるとノルウェー南岸のあちこちで縦横に走っているのを目撃されていたイギリス艦隊の一部に戦闘を仕掛けるために出航した。ドイツ軍は敵を、最初5月31日午後4時にスカゲラクの沖合約70マイルのところで確認した。それは「カリオペ」型（1904年、4,000トン）巡洋艦4隻であった。

ドイツ巡洋艦隊はただちに、北方に最大速度で走る敵を追跡した。5時20分にドイツ巡洋艦の一隻が西の方角に2列となって進む敵艦を確認。巡洋戦艦6隻と多数の小巡洋艦および駆逐艦であった。敵は艦隊を南方へと展開した。ドイツ巡洋艦は13kmの距離にまで近づき、南南東に航路を取りながら非常に効果的な砲撃を開始した。この戦闘中にイギリスの巡洋戦艦2隻と駆逐艦1隻が撃沈された。半時間の戦闘の後、ドイツ軍は敵艦船

の北方に新たに強力な敵艦船を視認した。これは後にクイーン・エリザベス型（1913/14 戦艦、28,000 トン、時速 25 ノットであることが分かった。まもなくしてドイツ主力艦隊が戦闘に加わった。敵は直ちに北方へと向き直って、イギリス巡洋艦隊の後にクイーン・エリザベス型戦艦 5 隻がぴたりとついて行った。敵は最大速度を出し、小さな集団にばらけることによってドイツ側のきわめて効果的な砲撃の圏内から脱しようとした。同時に東に進路を取って、ドイツ艦隊の先端を迂回しようとした。ドイツ艦隊は敵のこの動きに最大速度で追従【対応】した。この間の戦闘で「アキレス」型（1905 年、15,750 トン）か「シャノン」型（1906/7 年、14,800 トン）の巡洋艦 1 隻とドイツ側の駆逐艦 1 隻が撃沈された。ドイツ艦船の後方についていた艦船はこの時間、艦の位置上戦闘に参加することは不可能であった。この後新たな艦船が北方から現れた。これは 20 隻を越える最新鋭の戦艦であったと報告されている。ドイツ艦隊の先端が一時的に 2 方面からの砲撃にさらされることになったので、艦隊は西に進路を取った。同時にドイツ水雷艇隊が攻撃のため敵に突進し、3 度にわたるきわめて激しい攻撃でめざましい成果を挙げた。この間の戦闘で敵のドレッドノート型戦艦 1 隻が撃沈され、他のドレッドノート型戦艦も多くが重大な損害を負ったことは確かである。優勢なイギリス艦隊に対する戦闘は暗くなるまで続けられた。結局戦闘に参加したのは多数の軽量艦を除いて、少なくともイギリス側は大型戦艦 25 隻、大巡洋戦艦 6 隻と装甲巡洋艦 4 隻、これに対しドイツ側は、大型戦艦 16 隻、巡洋戦艦 5 隻と旧式戦艦で、装甲巡洋艦は 0 であった。

暗くなってからは、ドイツ水雷艇隊が敵への夜襲にかかった。夜のあいだ巡洋艦戦と水雷艇による数多くの攻撃が行われた。この攻撃の間に、「アキレス」もしくは「シャノン」型巡洋艦 1 隻と小巡洋艦 1 隻あるいは 2 隻（こちらの可能性が高い）、そして少なくとも 10 隻の敵駆逐艦がドイツ軍によって撃沈された。ドイツ艦隊の先頭艦（別の報道では S.M.S. (帝国軍艦) ヴェストファーレン）は単独でこのうちの 6 隻を撃沈した。撃沈された駆

逐艦の中には、最新鋭の統率艦「タービュレント」と「ティッペラリー」(1915年、1,900トン)がある。イギリスの旧式戦艦の一団が南方から戦場に急いだ、到着したのは6月1日の朝であり、戦闘は終結していた。この艦隊は戦闘に加わることなく、あるいは単にドイツ側艦船主力の視界に入っただけで、転進した。

以上がドイツ側の報告である。ドイツ側公式発表によると、ドイツ軍の損害は以下のとおりである。戦艦「ボンメルン」、小巡洋艦の「ヴィースバーデン」と「フラウエンロープ」および水雷艇5隻である。小巡洋艦「エルビング」は他のドイツ艦船と衝突し、沈没した。ロイター電によると、後のドイツ側公式発表ではさらに巡洋戦艦「リュッツォー」と小巡洋艦「ロストック」の損失も加えられていたとのことである。ドイツ側からの報道はまだない。

ドイツ軍指揮官のシェール海軍中将与ヒッパー海軍中將が皇帝陛下からプール・ル・メリト勲章を授けられた。シェール副提督は海軍大将に昇進した。

## 収容所展望

私がこの前、このコラムを執筆していた時、それが最後のものになるであろうと思っていた。逃亡を企てていたからである。2日の夜、収容所を抜け出し、日本人に変装してセイミ丸に乗船した。あいにく、そこで外国人であることがばれ、否応もなく収容所に連れ戻されたわけである。重謹慎30日と減給1ヶ月がその代償であった。そんなわけで、私は自分の持ち場に戻り、平和が来て、ペンを止める日が来るまでコラムを書き続けることにする。

この逃亡は失敗したものの、当然ながら収容所への影響なしにはすまされなかった。たくさんあった生け垣の穴は全てふさがれ、歩哨が垣根沿い

に歩けるように、また見通しが良くなるように出店と鳥小屋は垣根から離され、点呼は朝の6時半と夜の8時半に設定された。こうすれば汽船の出航には間に合わないからである。

聖霊降臨祭が過ぎた。ここでは、祝うと言えるほどのことはできなかった。聖霊降臨祭でいちばんの驚きは、永らく絶えていた故郷からの郵便の到着である。たくさん届いた手紙は、確かにもう何ヶ月も前に出されたものではあったが、でもやはり貰えるだけで嬉しいものである。もちろん、手紙はこれから数ヶ月、また来なくなることを覚悟しなければならない。天候は再び不安定になり、スポーツ競技会を始めたものの、一時中断しなければならなかった。日中の気温は、常に25度を越えるようになった。夜はまだある程度涼しい。今はちょうど、満月である。魔法のような月光がまるで昼のように光をひろげ、単調な蛙の合唱が聞こえる中、夜中の散策へと誘う。空を泳ぐ鯉は姿を消し、竹竿だけが庭にによっきり立っている。その代わり、四角い凧が夕空に上がっている。川にはしばしば、日よけに青いカーテンをした船が現れる。船に乗った人は、非常におかしな仕草をし、収容所の方に手を振り、それに応えてもらおうと喜ぶのである。この人たちは、もうこんなに長い間ここに拘束されている、哀れなわれわれ俘虜を同情してくれているのだ。先日、日本の陸軍省の将校による収容所の視察があった。どうやら、まだ長時間ここにいななければならないと踏んでいるようだ。視察によって、なんらかの改善がもたらされるといことはないだろう。われわれは日本の状況から見て、非常に良い暮らしができてきている。ただ、夏に海か川での水浴が許されるのを期待したいところだ。

## スポーツ週間

天気が悪かったために、今月の 10 日になってようやく競技を開始することができた。この 1 週間のうちに大部分がすんだ。紙面が足りないため、これまでの結果を今は掲載できない。  
今日の午後には収容所内で陸上競技が始まる。

### 第 41 回演奏会 (1916 年 6 月 18 日、日曜日)

1. 「万歳、皇帝がやって来る」 トランスラトウール
2. 「客人のワルトブルク城への入場」 ワーグナー  
『タンホイザー』より
3. 『ヴァレンシュタインの陣営』より「騎士の歌」の  
パラフレーズ ペーターズ
4. ワルツ「すばらしきかな、人生」 エドゥアルト・シュトラウス
5. インディアン風間奏曲「赤い羽根」 ミルズ

### 第 42 回演奏会 (1916 年 6 月 25 日、日曜日)

1. 行進曲「デュッペルの要塞」 ピーフケ
2. 「ローレイ」のパラフレーズ ネスヴァトバ
3. 喜歌劇『フィレンツェの精霊降臨祭』メドレー ヒブルカ
4. ワルツ「わがウィーンの心」 エルトル
5. 「コロラド川」 アメリカ風ロマンス イェッセル

## 図書室

この2週間でさらに20冊が、寄贈を受けたり利用に供された。その内の何冊かを以下に紹介しよう。

ラーベ、Wilh.	『ビュツォーのガチョウ』
インマーマン、K.	『オーバーホーフ』
オンプテータ男爵	『ヘルツェロイーデ』
シュトラツ、Rud.	『イギリス人の妻』
ベルン、Max	『金のミューズ神』
ボーイ・エド、Ida	『王室の商人』
ビューロー、Frieda v.	『熱帯精神病』
ドーデ、E.	『奈落の縁で』
アミントス、G. v.	『良心の苦しみ』
クンツ、H.	『王妃軽歩兵連隊ベルギー、フランス 旅行記』
『ヴィーラント』ドイツ芸術文学週刊誌	

この場を借りて寄贈者に心からお礼を申し上げる。

紙幅が足りないため、「ヴェルダン」続報は次号にお送りする。

編集部

## シュピーゲル（鏡）



『トクシマ・アンツアイ  
ガー』第3巻第11号  
(1916年6月18日)  
ユーモア付録



勝利だ！

イギリス国王が海岸に立っていた。—そこに壊れた板が流されてきた。—近くにまで来たとき、気づいた。—あれまあ、男がひとり、それにつかまっている。



運良く波に運ばれてきて、男はうやうやしく礼をした。王は驚き嘆きつつ気づいた。ビーティー、巡洋艦隊提督ではないか。



彼はしばし黙っていた —（おそらく十分に息が吸えなかったのだ）—  
それから次のように報告した。



王様。私は敵を殲滅いたしました。— 徹頭徹尾ぶちのめしました — 二度とわが軍を攻撃しようとは思いません。— 確かに艦船はなくしてしまいました。みんな海底に沈んでおります — しかし、そんなことは何でもありません — 安らかに眠ってもらえばいいのです — 敵は港に戻りました — このことではっきりわかります — わが軍は勝利したのです — 敵にはたっぷり泡をふかせてやりました。



この言葉が彼の口から放たれるや — もう記者達もそれを耳にし、 — 全世界に向けて大忙ぎで送信した — ビーティー提督は英雄だ、と。 — 彼をたたえて長らく歌が歌われた — 「トラファルガー以来最大の勝利を収めた」

王だけは弱々しくほほえみ — 指折り数えて — こう言った。提督があと2度でもそうやって勝ってくれと、私が見えるのはかろうじて船一隻になる。 — だから、ビーティー君、今回はよしとするが — 将来は勇気にはやりすぎないように — 再度ドイツを叩こうとするなら — まず許しを得てからにしてくれ —

